主格ガの確立と近代日本語の成立：
助詞のプロファイルと制約の競合という観点から

菊　田　千　春

1．はじめに

一般に，日本語が古典語から近代語への転換期を迎えるのは中世，室町期とされている。中でも近代語への転換として重要なのは，連体形終止の拡大･一般化が進んで係り結びの消失が決定的になったことと，格助詞ガが，明確に主格表示として用いられるようになったことが挙げられる。

近年，日本語の歴史的な変化･発展については，国語学のみならず，言語理論からの光も当てられるようになってきた。とりわけ万葉集のデータを元に，上代日本語の姿を明らかにしようという動きが活発である(cf. Watanabe 2002, Kato 2003, Yanagida 2003, 2005, Kuroda 2005)。これらの研究はまだ始まったばかりであり，対象となるのもまだ上代に偏っているが，その中で，Yanagida (2003)は，山田(2000, 2001)の実証的研究を手がかりに，近代語への転換についても興味深い分析を提案している。

生成文法での研究では，どの音形を持った格助詞が使われるかは，基本的には統語構造上の生起位置によって自動的に決定されると考えが主流で，古典語に関する研究でも，その前提は暗黙裡に引き継がれていることが多い。(cf. Watanabe 2002, Yanagida 2003)。[1]

しかし，Kikuta (2003)は，格助詞を統語構造の位置をただ反映するものと考えることは適切ではないと論じた。特に，無助詞がもっとも普通の形式として使われ，対格や主格の格助詞が未確立であった古典語やそこから近代語

への変化を考える時，項の格認可の仕組みと考えられる抽象格の付与と，その音形上の表現形である形態格（格助詞）を区別する必要があると主張した。

本稿では，格助詞の生起を句構造のみから論じることはできないという立場に立ち，主格の格助詞ガの確立の過程を検証し，それを，係助詞ガの性質自体の変化と，室町期に見られた日本語というシステムの変化の両面から捉えることを目指す。LFG，HPSG らの制約に基づく句構造文法の語彙主義の主張にしたがい，主語はそれを統語的に選択する主要部の述語により認可され（＝主格という抽象格が付与され），それについては古典語も近代語，現代語も変わりはないと想定する。そして，主格の格助詞ガの確立は，その抽象格がいくつかの表現形で表されていたのが，次第に，助詞ガという形態格で表現されることに固定化していくことと解釈し，その過程を捉える方法を提案する。

具体的には，Kikuta (2003)で提案した，上代日本語の助詞のプロファイルや助詞選択にかかわる制約とその優先順位を拡充し，中古以降のシステムにも適合するよう修正し，最適性理論に順ずる仕組みをもちいて，近代日本語にいたる過程をとらえる。このような形で変化をとらえることにより，日本語の助詞やそれに関係する体系がどのように変化したのかを明確にすることができる。また，後で述べるように，主格ガが確立する過程には２つの系列が観察されているが，その２つの関係を明示的にとらえることができるようになる。

以下第２節では，まず，生成文法での古典語分析を概観する。これまでの分析では，主格ガの確立にふれたものでも，主眼はそれと対比した上代日本語でのガの取り扱いに限られているが，格助詞というものを理論的な言語学でどのようにとらえてきたか，また，古典語と近代語での主格ガの違いがどのように分析されてきたかを確認する目的でYanagida (2003)やKuroda (2005)を検証し，その問題点を指摘する。第３節では，実証的な国語学研究で明らかになっている主格ガの確立の過程を紹介し，主格ガの確立に関して，確認されている事実と，解かれていない問題点を整理する。第４節では，新しい

分析を提案する。

2．生成文法での古典語研究

Yanagida (2003)は万葉集を元に，上代の日本語の構造を提案している。特に，ガ格，ノ格とヲ格の間の語順制約や，人称代名詞アレ，ナレとその短縮形（Cliticと分析）であるア，ナと格助詞の共起可能性から，ガとヲをそれぞれ vP と VP の主要部と主張している。

主格ガの確立という点から興味深いのは，Yanagida (2003)では上代語のガ格の生起位置と対比させて，近代語のガ格の位置を示唆している点である。(1)に示したのがその構造で，左側が上代の構造，右側が近代語の構造である（Yanagida 2003: 109）。ポイントは，上代ではガ格名詞はTPを必要とせず，vP内部にとどまっていたが，近代語では，TP（また，CP）の位置まで繰り上がるようになったということである。つまり，近代語以降のガ格は，上代の焦点句（係り句）などが生起していた CP の領域に起こるようになったと主張していることになる。そして，この近代語への転換期は，鎌倉から室町期と仮定されている。

(1)　$[_{CP}$ XP zo $[_{vP}$ NP ga $[_{VP}$ . . .]]]　>　$[_{CP}$ XP ga $[_{vP}$ t $[_{VP}$ . . .]]]

この主張の土台には，鎌倉期にガ格が主格として発展するころ，強調表現である係助詞ゾの代わりにガが生起するようになったという山田(2000)の観察がある。Yanagida (2003)は，主格ガの強調用法が拡大した結果，述語と強く結びついた語順制約が崩壊し，室町期には係助詞ゾの構造の位置に主格の格助詞ガの生起する構造に変わっていったと提案している。このことはまた，主語とは別の係り句が必要なくなったということから，Topic-Prominentな古典語がSubject-Prominentな近代語へと転換していくことを示すという。この主張は日本語の大きな変化を捉えた大変興味深いものといえる。[2]

しかし，Yanagida (2003)の主張は，問題も含んでいる。[3] まず，次節でもみるように，近代語に向けて拡大しだしたガは必ずしもゾの代わりにのみ生じたわけでもない。安達（1992）が述べるように，厳密にテキストの対応を調べると，むしろ，鎌倉期のゾが室町期のガに直接対応する例は少なく，主格のガは，無助詞に取って代わる形で広がっている。(1)の構造では，係助詞ゾとの関係のみをとらえる一方，無助詞主語に代わって主格ガが広がることがどのように結びつくのか明白でない。

さらに，ガの強調用法の拡大によって語順制約が崩壊したという因果関係の解釈にも疑問の余地がある。たしかに，山田（2000）は文献調査の結果，ガが主格として一般化するに先立ち，ガは強調的な意味で使われるようになると述べている。後述するが，それによると，ゾとガは平安期には約９：１くらいの割合で使われていたが，鎌倉期になると，５：５に近いところまでガの使用が増える。しかし，ガがゾの代わりに使われることが原因となって語順制約が崩壊したとは考えにくい。上代の係り結びを支配していた語順制約が消失するのは，まだガの強調用法が広がっているとはいえない中古（平安期）である。この語順制約が上代にしか見られないことは，Watanabe (2002)の，上代日本語は wh- 移動の言語であったという主張の基礎になっている。Yanagida (2003)は近代語への転換の前，係助詞ゾやカは CP が領域でライセンスされると仮定しているが，中古はすでにwh-in-situの特徴を持っているはずであり，係助詞ゾやカが CP の領域に移動している必要はなかった。すでに CP 位置に移動する必要がない係助詞に取って代わったといって，どうして，格助詞ガが上代の係助詞の生起位置に生起するという結論が導けるのだろうか。つまり，ガ格主語が係助詞ゾの生起位置であった Focus phrase 内に移動した結果，（CP の領域に係助詞がいられなくなり）係り結びが消失したという主張は，時間的な整合性を欠いているといわざるをえない。

もちろん，言語変化にどれくらいの時間を要するのかに明確な答があるわけではない。Watanabe (2002)によれば，係り結びの崩壊は，室町期と言われ

ているが，本当は，上代の語順制約が消失した時から始まっている。順序はともあれ，wh- 移動であった係り結びの消失と，CP (FP)への主格の移動が徐々に進行したと考えることは不可能ではないかもしれない。しかし，上代日本語と近代日本語だけを比べて，その間は過渡期にすぎないと断定する根拠もまた乏しい。

同様の問題は，Kuroda (2005)にも見られる。Kuroda (2005)では，上代日本語の格の仕組みを現代英語に近いものととらえている。すなわち，Kuroda (1988)の分析をもとに，言語をForced Agreement言語とNon-forced Agreement言語に分け，英語をForced Agreement言語とし，技術的な詳細は省略するが，それを，義務的なwh-移動などの統語現象を結びつける。一方，現代日本語はNon-forced Agreement言語であり，格の認証は義務的な統語操作では起こらないとする。形態格（格助詞）は，統語的に認証されなかった格を認証する役割を果たすと考える。その仕組みは，義務的なwh-移動がないことなどとも関係付けられている。Kurodaは，上代の日本語の格助詞ガ･ノやヲが純粋な格マーカーではなく，また，無助詞が一般的であったということから，現代日本語に見られるような格助詞による格認証は行われていなかったとする。そして，そこから，格認証のメカニズムは統語的なもの（抽象格付与）に限られていたと考え，上代日本語は義務的な統語操作によって行われていた。すなわち，英語と同じようなForced Agreement言語であったと主張する。そして，このことは，上代日本語に義務的な焦点移動(Focus movement)と解釈しうる，係り結びをふくむ語順制約があったこととも合致すると述べる。しかしながら，確かに，上代日本語と現代日本語では格表示の仕組みに違いがあったとしても，では，形態格でなかったガ格やノ格，ヲ格が，形態格になった過程はどのようなものだったのだろうか。Kurodaの分析は，そのような問題は射程に入っておらず，上代日本語と現代日本語の仕組みのみを対比させて，その間はその移行期であると想定されているようである。

もっとも，Yanagida (2003)も Kuroda (2005)も，主眼はあくまでも上代日

本語の構造であるから，あまりこのような批判は正当とはいえないかもしれない。しかし，変化にある程度の時間がかかることは事実としても，主格の格助詞ガの発達や確立は，それほど単純に進んだわけではない。平安期から鎌倉期の500～600年にわたる中古日本語を単に移行期と決め付けるのはやはり早計ではないだろうか。

3．主格ガの確立の過程

3．1．実証的にわかっていること

よく知られているように，古典日本語と近代日本語ではいくつかの重要な違いがある。近代語にはない古典語の特徴として，以下のことがあげられる。

(2) a. 主語と目的語は無助詞であらわれることが多かった。
b. 格助詞には未発達のものがあった。
c. ガ格とノ格は主格と属格の両方の役割を果たしているように見える一方，主格としては，主に連体形述語の節にしかおこらず，終止形述語で終わる主節の主語にはならなかった。終止形節の主語は無助詞や係助詞のハなどが使われた。
d. ガ格とノ格の使い分けは上接語の意味的な要因によるといわれる。
e. 係り結びが発達していた。上代（奈良期）からみられ，中古（平安期）に広がるが，中世（鎌倉・室町期）になって衰退する。

これらの性質は上代にもっとも強く観察され，徐々に弱くなっていく。ここからも伺えるが，ガ格が主語のマーカーとしてもちいられる例は上代から観察される。「主格ガの確立」とは，（1）主格が，無助詞ではなくガ格を要求するようになったことと，（2）主格が，ノ格ではなくガ格のみになったこと，そして（3）述語の活用形に依存せず，終止形終止の節にも生起するようになったことを含んでいる。このような言語変化は室町期に明確になり，

江戸中期ごろに完了したといわれている。

柳田（1985）によれば，中古（平安期）までがガ格の連体格期，中世（鎌倉・室町期）が連体格主格並存期，近世（江戸期）以降が主格期であるという。室町期のガ格は，いまだ連体格の機能も持ち，また，ノ格との分化も完全ではなく，また主語マーカーとしては，まだ無助詞のほうが多かった。それでも，ガは主格，ノは属格へと傾斜しており，また，格助詞の使用も明らかに増加してきていた。

国語学での主格ガの確立の通説は次のようなものである。室町期には，係り結びの崩壊という大きな言語変化が起こった。その裏には，係り結びの広がりによって，連体形終止節の使用が拡大し，終止形終止と連体形終止との区別が消失し，連体形で結ぶという係り結びの形式が壊れてしまったことがある。さらに，連体形と終止形の区別がなくなっていったことから，本来，連体形節に限られていた（いわば暫定主格であった）ガ格とノ格が，述語の活用形にしばられなくなり，主節までその分布を広げていく。その過程で，ガ格とノ格の機能分化がおこり，最終的には，ガ格が，主節にも従属節にも用いられる，正式な主格としての地位を獲得するに至る。

室町期末期にかけての言語（口語）の様相は，当時のキリシタンが残した文献から詳しく知ることができる。中でも，鎌倉期から室町期の言語変化を明確に伝えてくれるのが，『天草版平家物語』（1592）（以下，『天草版』）である。これは，ポルトガル人宣教師達が日本の言語と歴史を学ぶ助けとするため，ファビアンと呼ばれる日本人が，平家物語の主だった部分を問答しながら語って聞かせるという体裁で書いた物語である。本来，外国人が日本語を学ぶための本として編まれているので，その当時の人々の言葉をできるだけ忠実にうつしつつ，崩れた言葉遣いではなく，「正しい」言葉遣いを模そうという意図がはたらいていたことが推察される。現物はすべてローマ字書きで，現在は大英博物館に1冊残るのみとなっている。『平家物語』はもともとは琵琶法師が語った口承文学であったので，成立時期を特定するのは難しいが，

だいたい13世紀の初めごろと考えられる。『平家物語』は口語体で書かれたわけではないが，口承文学でもあり，その当時の言語の様子を伝えると考えてよいだろう。『天草版』は『平家物語』に比べて短いが，内容を比較すると，次節以降で見る例にも示すように，一言一句レベルで対応が見出される箇所も相当数にのぼり，13世紀から16世紀末という，古典語から近代語へという日本語の最も重要な転換期の様子を知る極めて貴重な資料となっている。[4] では，そのような室町期の資料に，主格ガの分布上の変化はどのように現れていたのだろうか。

３．２． ゾの消失とガの拡大

『平家物語』と『天草版』を比較して，まず気付くのは，前者で見られた係助詞ゾが，後者でほとんどなくなっていることである。江口（1982, 1994）の調査では，『天草版』全体で，終助詞として文末に使われるゾは364例あるが，係助詞ゾはわずか16例しか見出せない。（イディオムを除く）それもほとんど，古典語の文体を写すと思われる和歌や「節を付けて語ろう」と宣言している部分（つまり，歌謡のような文学的文体の部分）に見出される。このことから，当時の口語体から係助詞ゾは消失していることがわかる。[5]

(3)-(6)に，原拠本で使われているゾが天草本で使われなくなっている例をいくつか示す。[6]

(3) a. なごりも惜しくかなしくて，甲斐なき涙<u>ぞ</u>こぼれける。
（百二十句　第五句　p. 61）

b. なごりも惜しゅうかなしゅうて，甲斐ない涙<u>が</u>こぼれた。
（天草本　巻第二，第１　p. 97, ll. 19-20）

(4) a.「なからんあとの形見にもや」と思ひけん，障子に泣く泣く一首の歌<u>をぞ</u>書きつけける（百二十句　第五句　p. 62）

b. なかろうずるあとの忘れ形見にと思うたか，障子に泣く泣く一首の歌を書いた。（天草本　巻第二，第１　p. 97, ll. 22-23）

(5) a. なにかくるしかるべき，参りて今様をもうたひ，舞なんどをも舞うて，仏なぐさめよ」とぞ宣ひける。（百二十句　第五句　p. 63）

b. なにかくるしかろうぞ？参って今様をも歌い，舞などをも舞うて，仏を慰めいと言われたれれば：（天草本　巻第二，第１　p. 98, ll. 22-23）

(6) a. 恐ろしければかなはず。ただ水の底にてぞ泣きゐたる。敵みな過ぎてのち，池よりあがつて，濡れたるものども絞り着て，泣く泣く京へむかひてぞのぼりける。（百二十句　　第三十九句　pp. 358-359）

b. をそろしければ，かなわいで，ただ水の底で泣きゐた。敵みな過ぎてのちに池からあがって，濡れたものどもを絞り着て，泣く泣く京へむけてのぼった。（天草本　巻第二，第７　p. 135, ll. 19-23）

このうち, (3)では，ゾがガに変わっており，古典語での係り句ゾと近代語での主格ガを対応させる Yanagida (2003)の構造(1)を支持するものといえなくもない。ただし, (4)-(6)の係助詞ゾは，格助詞などとの複合形で用いられていたのが，ゾのみが落ちている。ここからも，ゾとガが単純に対応するわけではないことは明らかだろう。言語変化という点では，いずれにおいても，原拠本で係り結びの連体形であった述語が，天草本では，係り結びを失い，終止形になっていることも重要である。このようにして，原拠本で用いられたゾはほとんどすべてが天草本では失われている。

このように，ゾに取って代わったのはガだけではないとはいえ，ゾとガの関係はこれまでからも論じられてきた。大野（1993）は，係り結びの衰退の中で，格助詞が発達していく様子を検証し，その中で，特に，ゾとガの関係をとりあげ，古典語ゾが担っていた役割をガが担うようになったと論じてい

る。従来，ゾは人間を指す名詞につくこともあったが，人間以外を指す名詞に付くことが多かった。一方，ガは人間を指す名詞につくことが多かった。しかし，ゾが衰退する中で，ガがその代わりをするようになっていった。『平家物語』ではゾが人間以外のものを受けるのが８割，人間を受けるのが２割であったが，意味的な使い分けは崩れ，『天草版』では，ガが人間以外のさまざまなものを受けるようになったとされる（大野 1993: 361）。

室町期にかけての主格ガの確立過程に関して，もっとも精緻な計量的文献調査に基づく分析を提案しているのが，一連の山田論文であるが，特に，前節でも触れた山田(2001)では，大野（1993）の意味的使い分けの観察を発展させ，ゾが消失し，ガが勢力を拡大していく様子を詳細に調査している。それによると，平安期には，ゾは一･二人称人称代名詞と人固有名詞には付くことができないという制約があり，もっぱらその他の有情物と非情物にのみついていた。そのような主語を強調したい時には，ガを用い，ゾの終助詞用法である「ガ・・・ゾ」形式を使っていたと考えられる。しかし，時代を経て，そのような上接語の意味クラスによる使い分けは崩れ，ガもゾも，上接語の種類には限らず用いられるようになる。そしてその一方，ゾによる強調は，その語（主語）のみを強調する用法に限定されていき，文全体を強調する場合には，ガが用いられるようになる。（ガは主語のみの強調にも用いられている。）そして，このような強調文脈で用いられるガの絶対数は増え続け，物語の会話文の強調主語は，平安期には，ゾが90.7%に対し，ガが9.3%にすぎなかったのが，鎌倉期になると，その割合が拮抗し，ゾが51.0%に対してガが 49% にまで増えた。

(7)

	ゾ	ガ
平安期	117 (90.7%)	12 (9.3%)
鎌倉期	25 (51.0%)	24 (49.0%)

山田（2000, 2001）によれば，原拠本で用いられた（連体形述語ではなく）名詞に付加された主節の主格「ガ」のうち，天草本と対応が見られるのは，(8)に挙げた３例のみであるという。そして，これらはすべて強調文脈のガと解釈されている。[7]

(8)　a. 鎌倉殿ノ御前ニテ　討死仕ラウスルザウト　申タルコトガ有ソ
（百二十句 p. 530）
b. 日来ハ　何トモ覚ヘヌ　薄金カ　今日ハ　重フヲホウルソヤ
（百二十句 p. 497）
c. あはれ，例の宰相が　物に心えぬ　（大系 p. 166）

つまり，『平家物語』の書かれた鎌倉期に，ガは強調を示す機能を担いはじめ，その点でゾと拮抗しつつあったといえる。

３．３．無助詞の代わりに進出するガ

ゾの消失に加え，『平家物語』と『天草版』を比較して気付くもう１つの点は，主格ガの使用が飛躍的に増えていることである。ただ，前節でも少し触れたように，ゾの代わりに使われるガはそれほど多くはない。談話上の意味・役割によってはゾはハやモに変わっている場合もあるし，どうしても強調の意味を強く示したい場合には，コソが代わりに用いられた（安達 1992）。『天草版』で急激に増えたようにみえる主格ガの大部分は，むしろ『平家物語』での無助詞主語の代わりに用いられているのである。

山田（2000）は，原拠本『平家物語』[8]と『天草版』で内容や構文上の対応が認められるものを詳しく比較調査し，原拠本で無助詞であらわれた主語が，『天草版』ではどのような形であらわれるかを，生起する統語的文脈に分けて計量調査し，主語表示の格助詞ガ格が拡大していく様子を明らかにしている。以下の表がその結果である。この表の最下段（「計」）に記されているのが，

原拠本で現れた無助詞主語で『天草版』に対応する主語が認められるものの数である。その他の段では，それが，それぞれの統語環境内で，『天草版』ではガ～無助詞の５種類のどの形をとって現れるようになったかを記している。

(9)

	連体節内	従属節内	主節内	複文	合計
ガ	36 (20.2%)	152 (33.5%)	84 (27.5%)	18 (2.7%)	290 (18.2%)
ハ	0 (0.0%)	40 (8.8%)	69 (22.5%)	87 (13.3%)	196 (12.3%)
モ	4 (2.3%)	25 (5.5%)	26 (8.5 %)	22 (3.4%)	77 (4.8%)
ノ	42 (23.6%)	10 (2.2%)	4 (1.3%)	1 (0.2%)	57 (3.6%)
無	96 (53.9%)	227 (50.0%)	123 (40.2%)	526 (80.4%)	972 (61.1%)
計	178 (100.0%)	454 (100.0%)	306 (100.0%)	654 (100.0%)	1592 (100.0%)

この表からわかるように，原拠本『平家物語』では，『天草版』に対応する主語がみられる無助詞の主語が1600例近く確認される。このうち，『天草版』でも無助詞で表れるのは，全体で60％強の970例余りである。残り40％弱が格助詞ノ・ガ，係助詞ハ・モといった，何らかの助詞を伴って表れるようになる。[9] いずれの助詞が使われるかは，その統語的な文脈によって傾向が異なる。要点を述べると，次のようになる。

まず，連体節では，無助詞のままのものを除くと，ノとガが拮抗している。この連体節とは名詞修飾節や準体節を指し，上代日本語のころからすでに無助詞，ノ，ガが生起するが，現代日本語においてもなお，ガノ交替がみられる環境である。[10]

次に，従属節は述語に連体形が用いられることが多かったことから，上代や中古では，これもノ・ガの生起環境に数えられてきた。興味深いことに，この調査によると，無助詞のままのものを除くと，ガの使用率が圧倒的に高くなる一方，ノの使用率はきわめて低く，名詞節や名詞修飾節以外で，ノとガの分化が進んでいることがうかがわれる。

一方，主格の格助詞ガの確立という点で何よりも重要なのが主節内でのガである。主節というのは，上代から中古にかけて，係り結びや連体止めなどによって述語が連体形になる場合を除いて，ノやガが生起できない環境とされていた。しかし，中古も時代が下ると，終止形と連体形の区別の消失などによって，ガが生起することも増えてきていた。この調査では，無助詞を除くと，ハをわずかに超えて，もっとも使用頻度が高くなっていることがわかる。[11] また，ノはこの環境ではほとんど生起できなくなっていることもわかる。(10)-(12)に挙げるのが，原拠本では無助詞で現れていた主節や終止形終止節内の主語が，格助詞ガを受けて生起するようになった例である。

(10) a. たとへ都を出ださるるとも，我御前たちは年φ若ければ，いかならん岩木のはざまにても，すごさん事φやすかるべし。
（百二十句　第五句　pp. 64-65）
b. たとい都を出さるるとも，我御前たちは年が若ければ，何たる岩木のはざまでも過ごすことがやすからうず。（天草本　巻第二　p. 100, ll.5-9）

(11) a. 誠に我御前がうらむるも理なり。かやうの事φ有るべしとも知らずして，教訓して参らせつる事のくちをしさよ。（百二十句　第六句　p. 68）
b. 誠に我御前の恨みも理りぢや。さやうのことがあらうとも知らいで，教訓して参らせた事の心憂さよ。（天草本　巻第二　p. 101, ll.5-9）

(12) a. 年老い，よはひおとろひたる母φ，とどまりてもなにかせん。
（百二十句　第六句　p. 68）
b. 年老い，齢おとろえた母がとどまってもなににしょうぞ？
（天草本　巻第二　p. 102, ll.14-16）

表(9)の最後の複文というのは，従位接続や等位接続によって一つの主語に

述語がいくつもつながっている場合をいう。この環境では，無助詞がまだ圧倒的に残っているが，無助詞でなくなったケースでも，談話上の理由もあるのか，ハやモが多い。[12]

以上をまとめ，原拠本『平家物語』で無助詞であった主語が『天草版』でガを伴うのは合計で290例にのぼり，特に主節内での勢力の拡大は，連体形という古代語的な生起環境の制約から解放されて，近代語に近い，主格ガとして確立していく様子を示しているといえる。また，このような文脈で拡大した主格ガは，特に係助詞ゾと関連する「強調」のような意味を伴わないことも指摘されている。

３．４．主格ガの確立をめぐる問題：２つの系列のガ格確立

このように，山田論文（山田 2000, 2001）の平安期から鎌倉，室町期までを視野に入れた調査・分析をまとめると，ガ格の勢力拡大・確立には，２つの系列があることがわかる。すなわち，１つは，ゾの代わりを果たすものとして勢力を広げていった強調文脈のガであり，もう1つは，格助詞の明示化が進む中で，無助詞主語に代わって使用頻度が高くなっていった中立の文脈でのガである。そして，前者は平安から鎌倉期にかけて起こり，後者は室町期に広がっていった。

では，この２系列は互いにどのような関係にあるのだろうか。山田(2000, 2001)によれば，強調文脈での用法の広がりが，無助詞に代わった主節のガの拡大に先行する。しかし主節に限らなければ（すなわち，連体形節内では），無助詞とガ（およびノ）は上代から主語マーカーとして交替していた。ならば，連体形と終止形との区別が消失すれば，ガが終止形終止の主節にも生起できるようになることは，当然の帰結である。また同時に，格助詞の明示化が進むならば，無助詞に代わって生起するガが主格の格助詞の地位を確立するのも，論理的に帰結する。つまり，強調文脈でのガの使用の増大は，主格助詞ガの確立自体になんら寄与しているわけではなく，論理的には余剰なで

きごとであったともいえる。[13] 別の言い方をすれば，強調文脈でのガと無助詞に代わるガの拡大が継起するのは，偶然にすぎないともみえる。

山田（2000, 2001）はこの２つの系列の主格ガが拡大する様子を記述するに留まっている。山田（2000）の主張点は，無助詞に代わる中立的なガ格の明示化は非対格述語の内項から進むということであり，述語の内項の格の明示化が内的動機付けであったということである。この主張のもととなる観察・分析には問題があると考えるが，[14] いずれにせよ，２つの系列の主格ガに関係があるとは思えない。「強調」という概念と「述語の内項」という概念は，全く異なる種類の概念だからである。もしも，強調文脈のガと無助詞の代わりとなったガが同音異義語ではなく，単一の格助詞ガとしてとらえられるとするならば，いったい，鎌倉から室町期にかけて，格助詞ガは全体的にどのような性質を持っていたのだろうか。無関係に見える２系列のガの発展は，ガや日本語の体系のどのような変化を映しているのだろうか。次節では，このような問題意識に立って，主格の格助詞としてガが確立する様相をとらえる方法を示す。

４．提　案

前節で述べたように，主格ガの確立を考えるには，係助詞ゾとの関係と，無助詞主語との関係の両方を視野に入れる必要がある。そして，それを考えるには，統語的な格助詞としての性質が不完全であったガの意味や機能が，どのように変化して，より格助詞としての性質をもったものになっていったかを見ていく必要がある。このような問題は，必然的に，ガの統語的な生起位置のみを捉える生成文法ではなく，ガという語彙の変化を捉えるアプローチを必要とする。

Kikuta（2003, 2005）では，上代日本語の格表示の選択は純粋な統語のみの問題ではないと主張した。特に，ヲ格の生起は意味に支配されているという指摘は根強くあり，主語や目的語には無助詞が多い。さらに，ノ格とガ格は，

属格としても用いられるうえ，述語が連体形であるなどの条件下でしか生起できない。また，格助詞が時代とともに意味や用法が変化したこともよく知られている。このような状況は，主語や目的語といった述語の項の生起が統語的に認可される仕組みと，格助詞の分布は独立した問題であることを示している。そこで，前者を抽象格，後者を形態格（音形格）の問題と区別し，上代や中古の日本語での格助詞の分布や，格助詞と関わる語順などの問題は，後者の問題として考えるべきであると主張した。そして，格助詞は，音形と意味を持つ語彙項目でもあり，それ自身の変化が日本語の体系としての変化と相互作用によって，観察されるような格助詞体系の変化を生み出していると分析した。

本節では，時代がさらに下ってガ格が主格助詞として確立するまでをとらえるにも，同様の方法が適用できると仮定し，その有効性を示していく。まず，Kikuta(2003)で提案した分析を基盤に，変化の要点を述べ，その後，各時代毎にその主張の妥当性をみていく。

４．１．助詞の通時的変化

ガ格が主格の助詞として確立し，一方，ノ格は属格へと分岐していくというような変化は，基本的には，ガ格とノ格の意味・機能に起こった変化と，日本語の体系に起こった変化の組み合わせによって生じたと考える。

より一般的には，述語の項となる名詞の表示の変化には，すくなくとも大きく２つの変化要因が関わっていると考える。

（１）助詞自体の機能変化

（２）日本語の体系上の変化を反映し，助詞の選択に関する判断要因の変化

どの助詞が使われるかの選択には，いくつかの判断要因が関与する。判断要因はそれぞれ重要度が異なり，どの要因が強く働くかは共時的な体系毎に決まっていると考える。この考えは，大まかには，動機付けの競合モデル(competing motivations model)を踏襲している（cf. Croft 2003）。以下では，

Kikuta (2003, 2005)同様，その流れをくむ確率論的最適性理論（Stochastic Optimality Theory: Stochastic OT）のモデルを用いることにする。すなわち，さまざまな，助詞選択に関与する判断要因を「制約」ととらえ，それぞれの制約の強さが時代とともに変化していくと考える。[15]

上代日本語での主語表示の分布を分析したKikuta (2003)では，助詞はそれぞれの機能を持っていると考え，それをプロファイル(profile)と呼んだ。プロファイルには様々な要素が含まれるが，助詞の選択に関与するものを談話的卓立性(discourse-prominence: 以下，d-prom)，文法的卓立性（grammatical prominence: 以下，g-prom），名詞性（以下，noun），述語性（以下，verb）の４つとし，それぞれ，正負の値をとるとする。[16] このうち d-prom は，強調，主題，対比など談話的に際立ちのある項につくか（＝際立ちを表すか）を意味し，g-promは，文構造上の際立ちをもつ項（＝主節主語）につくかを意味する。また，nounは，名詞格か(＝名詞性を持つ主要部の項に付くか)，verbは，述語格かを意味する。

(13)に示すのが，上代において可能な主語の表示のうち，主格の確立過程に関わる係助詞ハ，ゾ，格助詞ノ，ガ，無助詞のプロファイルである。[17]

(13) 助詞のプロファイル

上代		d-prom	g-prom	noun	verb[18]
	ハ	＋	＋	－	＋
	ゾ	＋	＋	＋	＋
	ノ	－	－	＋	±
	ガ	－	－	＋	±
	無	±	＋	－	＋

Kikuta (2003)は，野村(1993)が，万葉集のデータの分析をもとに，上代日本語のノ・ガを名詞的な文脈に生起する名詞格であったとする国語学上の通

説を破棄したのに対し，ノ・ガを名詞格としながらも，観察された各助詞の分布を制約の競合の結果として捉えることができることを示した。そのポイントは，助詞自体のプロファイルが，直接，その生起を決定するのではなく，助詞の生起を決定する判断要因（制約）との組み合わせで生起の分布が決定されるということである。つまり，ある助詞が何らかの機能をもっているから選ばれる，持っていないから選ばれない，という単純な関係で助詞選択が決まるのではなく，仮に，ある助詞が必要な何らかの機能を持っていなくても，それよりも重要な要件を満たしているのがその助詞しかなければ，その助詞が選ばれるだろう，と考えるのである。

(14)は，上代での助詞分布を説明するための制約と，その重要度のランキングである。

(14) Faith(d-prom)$_{80}$ ≪ Faith(cat:n) $_{63}$ ＜ Faith(g-prom) $_{60}$ ＜ Faith(cat:v) $_{50}$ ≪ ＋STR(case) $_{20}$

これらの制約の意味は(12)のようなものである。[19]

(15) a. Faith(d-prom)：項が談話的な際立ちを持つとき，また，そのときに限り，＋d-promの助詞によって適正にマークされなくてはならない。

b. Faith(g-prom)：項が文法構造上，際立ちを持つ（主節主語）とき，また，そのときに限り，＋g-promの助詞によって適正にマークされなくてはならない。

c. Faith(cat: n)：主要部の範疇(category)が名詞性を持つとき，また，そのときに限り，＋nounの助詞によって適正にマークされなくてはならない。

d. Faith(cat: v)：主要部の範疇(category)が述語性を持つとき，また，そのときに限り，＋verbの助詞によって適正にマークされなくてはな

らない。

e. ＋ STR(case)：格は明示的に示さなくてはならない。

ここでは，確率論的最適性理論の立場を取る（cf. Boersma 1997, Bresnan et al. 2001, Kikuta 2003）。そのため，通常の最適性理論のように制約間の強さの違いを相対的な順位だけでとらえるのはなく，個々の制約の強さは数値化した「重み」で表される。このモデルは，複数の選択の余地があるケースや言語変異をとらえるのに有効であるとされ，ここで問題としている日本語の主格の確立過程をとらえるのにとりわけ適している。制約の強さを絶対的な数値で表すことにより，優位差はあるものの拮抗している制約同士の関係や，優位差が大きく離れている制約同士の関係を，生起頻度差と結びつけることができる仕組みになっている。また，違反しても全く影響を及ぼさないくらいに重みの低い制約もとらえることができる。なお，ここで示す数値は仮定上のものであり，≪は＜よりも重みが大きく離れていることを示している。

（14）のプロファイルと(15)の制約の組み合わせによって，上代の主語表示の分布が導かれるが，その要点は次のとおりである。[20]

(16) a. [生起環境１]

主節主語ではハ，無助詞は可能だが，ノ・ガは生起しない：

Faith(g-prom)から，ハと無助詞が生起することが予測される。また，主節述語は終止形終止であるので，名詞性を持たないことから，Faith(cat: n)からも，－nounのハと無助詞のみが生起できることが予測される。

b. [生起環境 2]

係り結びの係り句の前に主語が来る時にはハと無助詞のみが可能で，ノ・ガは生起しない：

係り結びの述語は連体形であり，名詞性を持つので，Faith(cat: n)からノ･ガのみが生起できると予測される。一方，係り句よりも前置される項は主題性を帯びており，談話的な際立ちが高いことから，Faith(d-prom)によれば，ハと無助詞のみが生起できると予測される。つまり，ここでは２つの制約が衝突するが，Faith(d-prom)の方が優先順位が高いため，Faith(cat: n)の結果を凌駕して，ハと無助詞のみの生起を許すことが導かれる。

c. [生起環境 3]

係り結びの係り句の後に主語が来る時には，無助詞とノ・ガが可能で，ハは生起しない：

係り結びの述語は連体形で名詞性を持つので，Faith(cat: n)からはノ・ガのみが生起できると予測される。しかし，一方，係り結び内の主語は，あくまで主節であるため，Faith(g-prom)から，ハや無助詞のみが可能であることが予測される。生起位置からも，係り句の後は談話的な際立ちのない位置と考えられるので，Faith(d-prom)から，ハは生起することができないと予測される。このように３つの制約がそれぞれ異なる予測をし，衝突が起こるが，もっとも優先順位の高いFaith(d-prom)により，ハは候補から外れる。残る２つの制約は，強さがほぼ拮抗していると仮定する。すると，残るノ，ガ，無助詞は，いずれもが最善の選択とはいえないものの，いずれもがある程度の要件を満たしていることから，この３つがすべて生起できることになる。

このように，すべての制約を満たす候補が１つであれば，その候補が生起するが，制約の予測が矛盾する場合も，それぞれの制約の優先順位，他の候補との相対的な優位関係によって，どの候補が生起するかが決まってくる。

では，このようなモデルで，中古以降の変化，とりわけ主格ガの確立をど

のように分析できるだろうか。結論を先取りするならば, (13)で示した助詞のプロファイルに(17)のような変化が起こったと考えられる。

(17)　中古＝上代と同じ
　　鎌倉＝「ガ」　d-prom が－から±へ
　　室町＝「ガ」　noun が＋から±へ

　　cf. 江戸＝「ガ」　noun が±から－へ，verb が±から＋になり, [－n, ＋v]に。
　　「ノ」　noun が±から＋へ，verb が±から－になり, [＋n, －v]に。

すなわち，鎌倉期に格助詞ガは，談話的な卓立性を持った項にも付くことができるようになる。室町期には，ノとガの分化が進むが，ガが名詞性を持たない項にも付与することができるようになる。その後，江戸時代に入って，ガが名詞格としての特性を失い，純粋な述語格へと発展していく一方，ノが名詞格になっていく。

さらに，このような助詞のプロファイル変化と並んで, (14)で示した制約の優先順位に, (18)のような変化が起こったと考える。

(18) a. 上代
　　Faith(d-prom)$_{80}$ ≪ Faith(cat:n) $_{63}$ ＜ Faith(g-prom) $_{60}$ ＜ Faith(cat:v) $_{40}$ ≪ ＋ STR(case) $_{20}$

　　b. 中古　(Faith(g-prom) receded, Faith(cat:v)proceeded,)
　　Faith(d-prom) $_{80}$ ＜ Faith(cat:v) $_{60}$ ＜ Faith(cat:n) $_{55}$ ＜ Faith(g-prom) $_{40}$ ≪ ＋ STR(case) $_{20}$

c. 鎌倉 (＋ STR proceeded)

Faith(d-prom) $_{80}$ ＜ Faith(cat:v)$_{70}$ ≪ Faith(cat:n) $_{55}$ ＜＋ STR(case) $_{50}$ ≪ Faith(g-prom) $_{20}$

d. 室町 (＋ STR further proceeded)

Faith(d-prom) $_{80}$ ＜ Faith(cat:v) $_{75}$ ＜ ＋ STR(case) $_{60}$ ＜ Faith(cat:n) $_{50}$ ≪ Faith(g-prom) $_{10}$

つまり，中古になると，Faith(g-prom)の順位が下がり，また，Faith(cat: n)と Faith(cat: v)が逆転する。鎌倉期になると，また，＋ STR(case)の順位が上がってくると共にFaith(g-prom)が一層下がる。室町期には，その変化がさらに進み，＋ STR(case)が Faith(cat:v)とも競合する強さになっていく。全体の変化をまとめると，＋ STR(case)と Faith(cat: v) の優先順位が徐々に上がり，Faith(cat: n)の順位が下がっていったということができる。

このような変化は一見複雑に見えるが，実は，別々の変化がそれぞれ一方向的に進んでいる。ガが主格の格助詞として確立しはじめる室町期までに起こった助詞自体の内的変化は決して劇的なものではなかった。また，制約の優先順位の変化も漸進的で，複雑なものではなかった。このような変化，両方が組み合わされることで，本当に，古典語から近代語へという大きな転換を生み出したと考えられるのだろうか。次節では，これらの仕組みで，これまで観察されている言語変化がとらえられることを示していく。[21]

４．２．検証

４．２．１．上代

上代の様子は，前節でまとめたとおりである。略式に，制約を優先順位毎に並べ，その制約に関するそれぞれの助詞のプロファイルの値を並べてみる

と(19)のようになる。

(19)	Faith(d-prom)80	Faith(cat: n) 63	Faith(g-prom) 60	Faith(cat: v) 40	＋STR(case) 20
	d-prom	noun	g-prom	verb	STR(case)
ハ	＋	－	＋	＋	－
ゾ	＋	＋	＋	＋	－
ノ	－	＋	－	±	＋
ガ	－	＋	－	±	＋
無助詞	±	－	＋	＋	－

この時代で注意すべきことは，＋STR(case)という制約はまだ働かないほど低く，本来表現されるべき格関係は，まだ明示的に表現される必要がなかった。また，そのことの裏返しとして，Kikuta (2003, 2005)で論じたように，上代日本語では述語格の形態格（格助詞）体系が未成立で，Faith(cat: v)も未だ影響をおよぼすような強さを持っていなかった。

助詞の分布の点から大切なことは，たとえば，ハとガはもっとも強い制約に関わるd-promの値が反対であることからも分布に重複がない。一方，ガと無助詞は，noun や g-prom の値は反対だが，Faith(cat: n)と Faith(g-prom)の強さが拮抗していることから，上にも述べたように，＋nounで＋g-promや，－nounで－g-prom のような環境では，いずれもが絶対的な勝者にも敗者にもならず，両方が生起することになる。つまり，文脈によって，ガと無助詞が交替する。[22]

４．２．２．中古

中古に入ると徐々に変化が表れる。助詞のプロファイル自体は変化しないが，制約の優先順位に変化が表れ，Faith(g-prom)が下がる。このことは，主節主語か従属節主語かということによって助詞の使い分けが行われる確率が

低くなることを意味する。もちろん，主節と従属節ではノ・ガとハの生起分布は異なるが，これは，主節主語が主題となることが多いことと Faith(d-prom)の組み合わせ，また，従属節の述語が連体形であることや Faith(cat: n)の組み合わせから得られる。また，Faith(g-prom)よりは高いものの，Faith(cat: n)も下がり，Faith(cat: v)と逆転する。Faith(cat: v)自体は，この候補がすべて述語の項に付与することができるというプロファイルを持っているので，結果的には候補間の選択に寄与することはないが，Faith(cat: n)の違反があっても Faith(cat: v)を満たすことの方が優先されることを示している。

上と同じように，略式の制約順と助詞のプロファイルを合わせて示すと(20)のようになる。

(20)	Faith(d-prom) 80	Faith(cat: v) 60	Faith(cat: n) 55	Faith(g-prom) 40	＋STR(case) 20
	d-prom	verb	noun	g-prom	STR(case)
ハ	＋	＋	－	＋	－
ゾ	＋	＋	＋	＋	－
ノ	－	±	＋	－	＋
ガ	－	±	＋	－	＋
無助詞	±	＋	－	＋	－

中古期に見られるようになった言語現象にはいくつかの重要なものがある。まず第１に，終止形終止の主節の主語にノやガが生起する例が見られるようになり，特に，無助詞の出にくい文脈などでその用法が徐々に広がっていったこと。[23] また，山田（2001）が観察するように，強調文脈の主語に「○○ガ・・・ゾ」という形で用いられる例が出てきた。これらはいずれも，上述の制約の優先順位変化によって予測される。

まず，終止形終止の節の主語にノやガが徐々に用いられるようになってきたことであるが，これは，Faith(g-prom)と Faith(cat: n)が下がることから予

測される。たとえばFaith(g-prom)が下がることからは，連体形述語の節であっても主節であるような係り結びや連体止め場合のノ・ガの生起が増えることが予測されるし，また，Faith(cat: n)が下がり，Faith(cat: v)が上がることからは，また，d-promが満たされておれば，名詞性を持たない終止形の節の主語に生起できるようになることが予測される。ただ，それでもこの状態では無助詞の方が制約の違反を含まないのだから，ノやガよりも優れた候補であり，ノやガの生起は例外的ではないかと思われるかもしれない。しかし，このことは，本分析の問題にはならない。事実，次節の(23)の表の値が示唆するように，中古期の主節主語は無助詞で現れる数が圧倒的であることには変わりない。ノやガはあくまでも徐々に無助詞の領域に入りつつあっただけで，無助詞と同等に分布し始めたわけでは決してないのである。

また，強調文脈でのガの進出であるが，これは中古の段階では，まだプロファイルが変更したとは考えていない。中古期に見られる「強調文脈でのガ」は，数も少なく，明確にゾと拮抗するような分布を示すようになるのは鎌倉期以降と考えられるからである。山田（2001）が示したように，意味的にゾが出ることのできない強調文脈では代わりにガが使われるが，それは，基本的には「ガ・・・ゾ」という終助詞ゾの強調表現の中で生じている。終助詞ゾは連体形接続であるから，ここでは，ガはあくまでも連体形文脈に生じていると考えられる。

また，「強調」という機能についても，注意が必要である。「ガ・・・ゾ」のように，係助詞ではなく終助詞ゾが用いられるときは，文全体にゾがついていることから，形式上は文強調である。[24] 山田（2001）は，このような中に上接語（主語）強調と解釈できるものが含まれているとするが，形式上は全文強調で意味的にはガの上接語（すなわち主語）を卓立させている場合，それは，主語がもともと叙述(predication)の中の核を担うものであることから得られた推意にすぎない可能性がある。また，その例は，前節でも挙げた12例のうち，５，６例にすぎない。つまり，山田（2001）の観察は，必ずし

も平安期のガが上接語調（＋d-prom）のマーカーとしての機能をすでに持っていたということを明確に示すとは言いきれない。[25]

４．２．３．鎌倉期：ガと無助詞の接近，強調文脈へ

鎌倉期にはいると，近代語の性格が徐々に強く出てくることになる。助詞や体系の変化としては，格助詞ガが＋d-promも表せるようにプロファイル変化が起こる。また，制約の優先順位としては，＋STR(case)の順位が上昇する。[26]

上にならって，鎌倉期の助詞プロファイルと制約の順位を合わせて略式に示したのが(21)である。

(21)	Faith(d-prom) 80	Faith(cat: v) 70	Faith(cat: n) 55	＋STR(case)50	Faith(g-prom) 20
	d-prom	verb	noun	STR(case)	g-prom
ハ	＋	＋	－	－	＋
ゾ	＋	＋	＋	－	＋
ノ	－	±	＋	＋	－
ガ	±	±	＋	＋	－
無助詞	±	＋	－	－	＋

ガのプロファイル変化によって，鎌倉期にはガが談話的際立ちのある主語につくという性質が明確になってきた。談話的際立ちといっても，主題性や情報構造上の特質によって，ハとゾやガは使い分けがあったと考えられ，おそらくハと無助詞は似た機能（＝主題，旧情報など）をもち，ゾはガに似た機能（＝焦点，新情報，総記など）をもったと思われる。そのようなことから，ゾとガは同じ上接語強調で拮抗しはじめる。形式的には「ガ・・・ゾ」という終助詞ゾの文脈に表れることが多いが，ゾのないものも生じ，増え始める。ここから，中古のような，文強調の形式を借りたものではなく，ガ自

身が上接語強調をあらわしうるものになったと思われる。

ところで，このように談話的際立ちのある項につくことができるようになったのは，ガという助詞に例外的な変化が起こったというわけではない。近代日本語のガには，機能的に2種類の用法が区別されることがある。久野（1973）の「総記」(exhaustive listing)と「（中立）叙述」(neutral description)のガである。このうち，総記のガは，係助詞のゾなどの用法を受け継いだものと考えられ,[27] 主格ガの成立過程でも，確かに，この２系列が認められる。しかし，この2つのガを別個のものと考え，同音異義のように分析するには問題がある。

１つの問題は，係助詞ゾは格助詞ではなく，主語以外の項や付加詞にも付くことができたのに対し，ガは主語か，叙述に対しての主題のようなものを表すものに限られる。つまり，係助詞ゾがガに取って代わられたのは事実としても，ゾがガになったわけではない。

さらに，総記のような強調の意味を担うのは，ガだけではない。実は(22)に示すように，現代日本語では，どの格助詞も，文脈や音調によって，総記と同様の意味を表せる。

(22) a.（京子ではなく）洋子が大学生だ
　　b. 洋子は，（りんごではなく）パイナップルを食べた。
　　c. 京子は，（隆にではなく）雄介にリンゴを渡した。
　　d. 京子は，（隆とではなく）雄介と結婚した。

(22a)の NP[ガ]は，中立的な主語ではなく，総記・焦点のような強調的な機能をもつ主語である。一方，そのような名詞句が主語でない場合，その文法役割に応じて，対格[ヲ]や与格[ニ]，その他の格助詞が用いられ，同じような強調的な機能を表すことができる。つまり，これらの文脈は，古典語では係助詞ゾによって強調が表現されていたが，近代語になってからは，係助

詞のような明示的な形態で表現されることはなく，強調があってもなくても同じ助詞を用い，音声的な強勢がその区別を担うことになる。事実，(22)の中では，いずれの場合にも，そのような名詞句に音声的な強勢が置かれる。

これらのことから，総記・強調という機能を表すガという助詞が一般的に存在するわけではなく，また，主格と無関係のガという助詞が存在するわけでもないことがわかる。[28] つまり，日本語が近代語へと変化をする中で，係助詞が衰退し，格助詞の使用が義務化されてくることは周知のことだが，それに伴い，格助詞によって表現されていた談話的な際立ちは，形態素では表現されず，音調や推意に依存することになる。このことは，どの格助詞も談話的際立ちを持つ項につくことができることを意味する。むしろ，談話的際立ちの有無に左右されずに用いられるというのは，まさに，文法的な役割を表す格助詞としての機能が強化されつつあることの裏返しと考えられる。

また，鎌倉期になると，＋STR(case)の優先順位が上がることから，格助詞の明示化が進む兆しが見えてくる。もちろん，まだ無助詞が多いが，ノ，ガともに終止形終止の主語にもみられるようになってくる。たとえば，野村（1996）の調査では，『源氏物語』，『宇治拾遺物語』，『平家物語覚一本』を比較すると，終止形終止の主語にノやガが生起する数は（23）のようになる。（比較のため，終止的連体形終止節（＝名詞修飾節や名詞節ではなく，係り結びの結び節など）の数値も示す。）

(23)

	終止形終止節		終止的連体形終止節	
	ノ	ガ	ノ	ガ
源氏物語 (1002 年頃)	3	0	253	1
宇治拾遺物語 (1213-21 頃)	32	3	125	15
平家物語覚一本 (1240 頃まで)	5	19	60	32

このように，終止形終止節の主語にノやガが用いられる例は『源氏物語』では3例しか見られないが，『宇治拾遺物語』では計35，『平家物語覚一本』で計24例に増えている。

興味深いのは，『宇治拾遺物語』で，終止形終止節の主語にガ格よりもノ格の方が圧倒的に多く使われていることだろう。『宇治拾遺物語』と『平家物語』はほぼ同時代の作品であるので，一見，ガとノがそれぞれ主格と属格に分化していくはずの方向と逆行しているようにもみえるかもしれない。しかし，これは，この時期，ノとガが明確な属格と主格という分化を完成させてはおらず，上接語の意味の他，ジャンルや文体上の好みによる使い分けが続いていたことを物語るものと解釈できるだろう。[29]

いずれにせよ，終止形終止節の主語位置は，ハなどの係助詞でなければ，無助詞が用いられた文脈であり，そこでノやガが用いられはじめるということは，Faith(cat: n)という制約と＋STR(case)という制約の優先順位を決定する「重み」が近づきつつあったことを示す。すなわち，終止形終止節の主語という文脈において，ノ・ガはFaith(cat: n)の違反となるが，無助詞は＋STR(case)の違反となる。鎌倉期にはまだ無助詞が多いのだが，それでも無助詞ではなくノ・ガの生起数が増えつつあることは，＋STR(case)違反が大きなものになりつつあることを示している。そして，この傾向が室町期に一層進んでいくことになる。

また，関連する興味深いこととして，ノ･ガのような名詞性と無縁の述語格などの助詞については，ノ･ガよりもずっと早い時期に発達し，鎌倉期にはすでに確立していたと考えられるが，＋STR(case)の制約が強くなるにしたがい，ゾの出る強調文脈ではゾと共起する例が増える。ゾが格助詞と共起する（ヲゾ，ニゾ，ヨリゾ，ニテゾなど）ことは奈良期より観察されるが，『沙石集』（1266）では，係助詞ゾの７割が格助詞を伴なったものになっているという（大野 1993: 217）。『平家物語』でもほぼ同様の傾向が顕著に見て取れる。ゾが単独で用いられているのは，もっぱら，ゾと共起が許されない主

格（*ガゾ，*ノゾ）の場合に限られるように見える。

４．２．４．室町期：ガの確立が決定的に

いよいよ室町期になると，近代語的な性格が明確になってくる。助詞のプロファイルの変化としては，ガとノの主格と属格への分化が決定的になり，ガが名詞性を持たない述語の項につくことができるようになる一方，ノの述語格性が失われる。また，制約の優先順位では，＋STR(case)がさらに強くなる。

上にならって，室町期の助詞プロファイルと制約の順位を合わせて略式に示したのが(24)である。

(24)	Faith(d-prom) 80	Faith(cat: v) 75	＋STR(case) 60	Faith(cat: n) 50	Faith(g-prom) 10
	d-prom	verb	STR(case)	noun	g-prom
ハ	＋	＋	－	－	＋
ゾ	＋	＋	－	＋	＋
ノ	－	±	＋	＋	－
ガ	±	±	＋	±	－
無助詞	±	＋	－	－	±

柳田(1985)が述べるように，助詞ガはまだ，主格・属格の両性期ではあったものの，主格の格助詞として確立しつつある。談話的な際立ちに左右されずに用いられ，また，述語の形に依存することなく，主語の項に付くことができるようになった。

この時代の最も大きな変化は，活用体系が変化し，連体形と終止形の区別がなくなったことである。このことは，Inputレベルでの述語の素性に変化が生まれたことを意味する。この場合，実際に起こったのは，連体形の拡大だが，終止形と同化することで，素性が，[＋v，－n]になると考えられる。[30]

この変化が影響を及ぼしたのは，係助詞ゾの生起である。つまり，連体形述語の持つ名詞性が失われると，Faith(cat: n)により，ゾも出られなくなる。鎌倉期以来，ガが＋d-promの項に付くことができるようになり，ゾの代わりとなることができるようになった今，Faith(cat: n)の違反であるゾには，もはや生起する余地がなくなったと考えられる。こうなると，強調文脈でも，ガがゾに勝るようになるのは自然である。[31]

また，この分析は，名詞性を持ち続けたノも主格名詞のマーカーとして生起できなくなることを予測するが，実際に，ノもゾとほぼ同じこの時期に，急速に主格名詞のマーカーとしての機能を失うのである。

４．２．５．江戸期以降

室町期で明確になった近代語の性質は，江戸期に一層進む。まず，ノとガの分化は完成し，ノが名詞格[－ v, ＋ n]，ガが述語格[＋ v, － n]となる。上代以降，ノとガの使い分けは上接語の意味によるものだったのが，文法的な文脈による使い分けが進んできたが，室町期には，両方が文法的に許容される名詞修飾節，名詞節文脈を除き，主格はガ，属格はノ，という傾向が強まったが，江戸期にその使い分けが一定の完成をみる。また，江戸期になると，＋ STR(case)の重みは上がり続けて，格助詞の使用頻度が高まっていく。[32]係助詞は多くがその勢力を失い，強調に意味を変えたコソと，係り結びに関与していなかったハやモなどのみが残っていく。

４．３．変化のまとめと考察

このように，4.1節で提案した助詞のプロファイルと制約，そしてそれぞれの変化によって，上代から中古を経て中世で近代語へと変わっていく日本語の主語表示の変化がとらえられることを示してきた。ここで示した変化をまとめると，次のようになる。

助詞のプロファイルという点では,(17)に示すように，鎌倉期になって，ガ

が談話的に卓立したものにも付加できるようになったことと，室町期以降，ノとガの名詞格・述語格という範疇的な分化が進むことがあげられる。このうち，鎌倉期にガが談話的に卓立したものに付加されるようになったのは，他の格助詞にも起こった一般的な変化と考えられる。

また，制約の変化という点では，(18)に示すように，中古以降，g-promが下がる一方Faith(cat:v)が上がり，その後，＋STR(case)の順位が徐々に上がり続けたということができる。この変化は，項の文法的な関係を格助詞などによって明示する傾向が強い言語へと変化したことをとらえる。[33]

このように，主格ガの確立につながる変化は一見複雑であるが，実際には，一方向的な助詞や制約順序に起こった小さな変化が組み合わされて生じたと考えることができる。では，このような変化をプロファイルや制約の組み合わせと分析することでどのような利点が得られるだろうか。

まず，第1の利点としては，主格の格助詞ガと強調文脈でのガの関係を明らかにすることができる。近代日本語のガには，機能的に「総記」と「（中立）叙述」の２種類の用法が区別され，主格ガの成立過程でも，確かに，この2系列が認められる。しかし，上で述べたように，総記・強調という機能を表すガという助詞が一般的に存在するわけではなく，また，主格と無関係のガという助詞が存在するわけでもないことから，この2つのガを同音異義のように別々の助詞がたまたま同じ音形をとっているものと分析するには問題がある。しかし，その一方，どのように総記・強調のガという機能が生じ，その一方で，中立のガの用法も広がったのかということは明らかではなかった。

本稿の分析では，ガが総記・強調という機能を表しうるようになることは，ガの格助詞としての確立と不可分の変化と考えられている。すなわち，日本語が係助詞を持たず，格助詞を明示する言語体系へと変わっていく中で，係助詞が担っていた，「談話的な卓立をもつ項につく」という特質は，格助詞が引き受けることとなり，格助詞は，談話的な卓立の有無には無関係に用いら

れるものとなった。[34]

また，無助詞とガの関係についても，上代以来の様相と室町期以降の様相を無理なくとらえることができる。山田（2000, 2001）では，鎌倉期までのガは強調に限定されており，無助詞に代わる中立のガが増えるのは室町期以降とされている。しかし，その捉え方は必ずしも正確ではなく，主節，終止形終止節に限らなければ，ガと無助詞は上代から多くの中立文脈で共存していた(cf. 野村 1993)。つまり，もともと上代からガには中立的な主語表示の機能があり，それに遅れて，強調用法が鎌倉期にかけて発達し，その後，室町期になると中立的な用法が強調用法を包み込むように広がったといえる。このような無助詞とガとの一見複雑な関係も，本稿の分析では無理なく連続したものとして捉えることができる。

さらに，無助詞については，中立的と解釈される一方，野村 (1993)はハに近いと分析し，Kuroda (2005)は，無助詞には主題化を受けた（topicalized）ものもあると分析しているなど，位置づけが明確ではなかった。上代での分布を見ても，ノ・ガが生起できない環境でハと交替する無助詞と，逆に，ハは生起できない環境で，ノ・ガと交替する無助詞がある。本稿では，無助詞を＋d-prom も－d-prom も表しうるものとして分析することで，一見矛盾した無助詞の分布に統一的な説明を与えることができる。

5．結　論

本稿では，格助詞は統語構造のみを映し出す記号ではないという前提に立ち，主格の格助詞ガが確立する様子を，格助詞のプロファイルの変化と日本語の助詞選択に関わる制約の変化という観点から分析した。近代語の成立をも特徴付けるという主格ガの成立は一見複雑に見えるが，本稿の分析方法では，卓立性や名詞性などの素性とその制約の順序という視点から分析することで，単純で漸進的な一方向的変化が複合的に起こった結果ととらえること

ができることを示した。

格助詞が統語的にどのような存在であるのかにはいくつかの意見がある。第1節でも述べたように，生成文法ではそれぞれの格助詞（ガ，ノ，ヲ）が，その項の統語構造上の生起位置を直接映し出す記号であるかのように考えるのが一般的であったが，生成文法内でも異論もある。たとえば，Harada (2005)は，項の統語的な認可と適切な格助詞の付与を別々のものと考える本稿の立場に近く，現代日本語でも，格助詞は狭義の統語ではなく，PFで付与されると主張しており，Kuroda (1988, 2005)の形態格の定義では，現れる格助詞の種類は統語構造には拠らないとことになる。本稿では，格認可，抽象格付与というものは主要部が項を下位範疇化（選択）することによって行われると考えており，それに基づきながらもそれとは別に，助詞の選択を，複数の，時には相反する制約の要求にいかに最適な解を与えるかという問題と捉えなおした。格は統語の中でも主要な問題とされているが，日本語の格助詞がそもそも何であるのかについて，理論の枠を越えて，今後検討していく必要があるだろう。

最後に，本稿で論じた最適性理論に準じた分析の妥当性について述べておきたい。最適性理論はもともと音韻論的なメタ理論として提案され，普遍性と個別言語の差異を一度にとらえられる仕組みをめざしている。そこでは，すべての言語に共通する一定数の制約があり，個別言語の差異は，それぞれの制約の優先順位の違いに起因するとされている。しかし，統語論や統語に関わるような現象を扱う場合，本来の音韻論の最適性理論の仮定をそのまま用いることは難しい。統語は本質的に意味と形式の２面をつなぐものであり，個別言語の体系と普遍的な法則も，音韻よりはるかに複雑な相互作用を示す。

本稿で主張した変化のしくみ，すなわち，格助詞の語彙的な性質（プロファイル）が変化する一方，日本語での格表示の仕組みにも変化が生じ，それぞれの漸進的な変化が組み合わされて，主格ガの確立につながる大きな変化へとつながっていったとする分析は，語彙項目でもある格助詞の様相を適切に

とらえるものと考える。しかし，ここで用いた形式化には限界もある。現実には，格助詞の語彙的な変化と制約の優先順位の変化が無関係に生じて組み合わさったというのではなく，いずれもが言語使用の頻度などによる影響を受けて，本来，動的に関わりあっていたと考えられる。具体的には，連体形の使用の拡大によって，終止形の区別が意味を失うことから，Faith(cat: n)の順位が下がり，また，主格ガのプロファイルにも名詞性の指定が意味を持たなくなる。また，それにともない，連体形述語は同じ形であっても終止形として機能するようになり，Inputの情報も変化したはずである。言語使用の頻度などによる影響を受けたこのような歴史的な変化は，制約の重みの変化だけではとらえられないが，現在のシステムでは，残念ながらそのような動的変化はとらえることができない。また，語彙的な表現形の選択を扱う以上，概念構造から言語構造へのマッピングよりも，もっと表層でのフィルターとして働いていると考えることも可能である。このような問題をふまえ，動的な言語変化をより適切にとらえるにはどのような形式化が必要であるのかを検討することを今後の課題としたい。

Notes

1 後で見るように，Kuroda (2005)は，格助詞の種類と統語構造を必ずしも対応させていない。上代については，無助詞のまま格認可は行われると考えており（＝抽象格），格助詞は統語的な意味を担っていないとする。現代については，統語構造ではなく格助詞（形態格）によって格の認可が行われていると考えている。そのため，格助詞の種類は統語構造以外のものによって決まっていると考えられる。また，Yanagida (2005)は，上代の無助詞の分布を取り上げ，Kuroda (2005)と同様に，抽象的な格付与が終止形の述語から行われていると論じている。それによれば，上代日本語は絶対格･能格言語の特徴をもっていたということになる。ただし，その分析はMiyagawa (1989)，Miyagawa & Ekida (2003)のヲ格付与論を下敷きにしており，データのほぼ半分をも占める「例外」の扱いを含め，問題が多く残ることをKuroda

(2005)は指摘している。

2 もちろん，現代日本語がTopic-Prominentではなく，Subject-Prominentと言えるのかという問題もあるだろう。ただし，ハ格で示されるTopicは残ったが，係り結びの関係を中心とした構造から，主述関係を中心とした構造へ変化したということは妥当な観察といえる。

3 Yanagida (2003)では，上代のガをvPの主要部と分析する一方，ノはPPを投射するに過ぎないと考える。しかし，そのような扱いが妥当なのか不明である。特に，人称代名詞のclitic（ア，ナ）がガとヲのみ共起可能（アガ，アヲは可能）で，ニやノは不可能（＊アニ，＊アノ）であることを統語的に重要な区別（主格，対格　vs. 後置詞，属格）としているが，実際のところ，属格の場合にもアやナはガと共起し，ノと共起しない（アガ妻，*アノ妻）。つまり，アやナとの共起可能性をもとに，ノではなくガだけが主格とするのは不適当である。また，従来より，人称代名詞はガ，指示代名詞はノ，という意味による区別が指摘されている（小路 1980）（ソノ　＊ソガ）。このような指示代名詞が主語となる例（ソノ）は見当たらないが，対格を持つ例（ソヲ）は万葉集にも数例見出せる。つまり，アノやナノが不可能なのは，構造ではなく，意味的な理由によると思われる。

4 『平家物語』は異本が多いのが特徴と言われるほどで，文体や内容，いろいろなものが伝わっている。そのうちどれが『天草版平家物語』の原拠本であるのかも確定的ではないが，天草版全４巻のうち，第１巻が『覚一本』，第２巻以降が『百二十句本』に近いとされている。これらの語り本の正確な成立年代は不明である。

5 山田（2000）は，『覚一本』でも，ゾによる係り結びは地の文，終助詞ゾは会話文，という相補分布が見られ，ゾによる係り結びは，口語では13世紀ごろにすでに消失しているのではないかと推察している。しかし，それでも江口（1994）によれば，係助詞のゾは『覚一本』で1664例も数えられ，単に保守的な文学的文体として残っていただけだと結論付けてよいかは明らかではない。

6 以下，用例は，山田（2000）より直接引用しているものを除くと，『百二十句本』は『平家物語』（新潮日本古典集成），『天草本』は江口(1986)から引いている。

7 山田（2000）の例は，『百二十句本』は，その複製本『斯道文庫古典叢刊之二　百二十句本平家物語』（汲古書院）による。また，『大系』は，『平家物語』「日本古典文学大系」（岩波書店）による。

8 山田（2000）は，原拠本として，『覚一本』巻１～３と，『百二十句本』巻４～７，巻９～12を用いている。

9 天草版平家物語は当時の口語を写しており，原拠本平家物語は語りとはいえ，文学的な文体であるため，この違いが単に時代の推移を映しているとはいえない。おそらく，原拠本が成立した鎌倉期にも，口語では格助詞の進出が進んでいたとは思われる。しかしながら，それでも鎌倉期の文献にこれほど無助詞主語が勢力を保っ

ているのは現代日本語での無助詞や格助詞の分布とは明らかに異質な様相を示している。ここからも，Kuroda (2005)が主張するように，無助詞主語＝上代日本語（奈良期）＝ Forced Agreement ＝義務的焦点移動（奈良期）が直接つながっていると考える根拠は強固とはいえないことがわかる。

10 連体節内でガとノがほぼ等しく競合するが，上代から中古では，ノの方が圧倒的に勢力が強いことを考えると，ガの進出が進んでいると見える。

11 格助詞と係助詞，という区別を重視し，ハとモを合わせて考えると，ガとハ・モはガにすこし勝ることになるが，勢力が拮抗していることには変わりない。

12 この環境では，現代語でももっぱらハが現れる。（e.g.「弘は，朝早く起きたが，うっかりもう一度眠ってしまい，気がつくと昼近かったため，ベッドから飛び起きると顔も洗わずに飛び出していった。」）

13 もちろん，強調文脈に生起できなかった助詞ノとの分化に寄与したということはいえるが，野村（1996）の研究にもあるように，ノとガの分化には，連体形の準体句主語にノが後続できないという点も大きく寄与していたと考えられ，強調文脈の寄与はこちらでも余剰であったといえる。

14 山田（2000）は，主節内で観察される主格ガ84例（cf. 表１）のうち，64%（54例）が非対格述語の主語につき，18%（15例）が形容詞の主語につく一方，非能格述語は16%（13例），他動詞は２％（２例）にすぎないことから，「ガによる主語表示は内項の明示化から進んだ」と主張する。しかし，以下の理由で，この主張には賛成しがたいと考える。

確かに，山田の調査によれば，他動詞主語への主格ガの付与が遅れていることは明らかであり，また，非対格の存在文で主格ガの進出が進んだのも確かなようである（なお，存在文で主格ガの進出が進んだことについては，大野（1993）にもすでに指摘がある。）

その理由について，山田(2000)は，他動詞文や非能格文では，他動性によって論理関係が支えられているので，外項の明示化は必要ないが，非対格文ではそうではないので内項の明示化が必要だったのではないかと推論しているが，その論理の妥当性ははっきりしない。むしろ，現代語で，ガ格よりもヲ格の省略の方が起こりやすいという指摘もあるように，内項の方が格助詞を必要とするという一般的な言語学上の理由は見出しにくい。

また，山田（2000）は，ガ格主語全体に占める各述語タイプの割合を算出して，主張を展開しているが，各述語タイプごとのガ格表示の割合を計算していない。そちらの割合を算出してみると，山田の主張は必ずしも支持されない。すなわち，全非対格文主語のうちガ格をもつのは47%（115例中54例）であるのに対し，同じく非対格とされている形容詞文の主語のうちガ格を持つのは20%（75例中15例）にすぎない。しかし，同様の計算で，全非能格文主語のうちガ格をもつのは35%（37

例中13例）に上る。（他動詞主語のガ格は3%（54例中2例）である。）つまり，述語タイプごとにみると，主語にガが用いられる割合が高いのは，非対格，次に非能格，そして形容詞文，最後にずっと離れて低いのが他動詞であるということがわかる。つまり，「非対格述語（含　形容詞）の主語にガ格が用いられる確率が高く，非能格と他動詞では低い」という事実は全く確認できない。この数値からは，むしろ，自動詞と他動詞の違いと考える方が事実に即しているように思える。山田が示す，主節の全ガ格主語を母数とした時に非対格文主語の割合が高いという傾向は，そもそも，非対格述語自体の使用率が高いことと関係しているのではないだろうか。ちなみに，非対格文主語でガ格を持つ54例のうち，存在文が43例を占めるが，江口（1994）の調査によれば，『天草版』で使われる全述語のうち，「あり」はもっとも使用頻度の高い述語である。

15 ただし，最適性理論（OT）の形は取るものの，形式化自体は便宜的なもので，音韻論などの標準的な最適性理論とはいくつかの点で重要な違いがあることに注意が必要である。

まず第一に，OTは本質的に類型論であり，言語普遍的に認められる制約の言語毎の序列のみによって，言語間の差異を捉えようとする。しかし，ここで問題とする助詞選択の場合，音韻論よりも複雑であり，上記のように変化要因には（２）のような制約の強さの変化だけではなく，助詞自体の変化も捉える必要がある。

16 Kikuta (2003)では名詞性（noun）のみを挙げていたが，中古以降の変化をとらえるために，ここでは述語性(verb)も加える。

17 Kikuta (2003)では，係助詞ゾには言及していない。

18 上代では述語性という素性はまだ意味を持たない。Kikuta (2005)では，上代のノとガを[+n]のみと規定され，述語性については未分化で値をもたないと分析している。ここではそのことを[± v]として示しておくが, [+n]のみにしておくか, [+n, ± v]とするかの違いは本稿の議論には影響を及ぼさないことを付記しておく。

19 このうち，Kikuta (2003)には，上代では影響を及ぼさないFaith(cat: v)と＋STR(case)は含まれていない。また，Kikuta (2003)では，Faith(GF)を用いて，例えば主語に主語を表示できない対格や与格が付くことを禁じたが，議論を主格を表示できるものにあらかじめ限っているので，簡便のため省略する。

20 詳細はKikuta (2003)を参照のこと。ただし，Kikuta (2003)では，名詞節・名詞修飾節内には，ノとガしか生起しないことになっている。この観察は正しくなく，特に述語が自動詞の場合，無助詞も可能である（cf. Kuroda, 2005）。この点については，名詞節・名詞修飾節の場合，体言止めの文も多く含まれていたことから，主語が－g-promの場合と +g-promの場合があったと仮定しておく。この仮定によって，ノ，ガ，無助詞の分布は導かれる。

21 ここでは時代毎に制約の優先順位が入れ替わったというような表記になっている

が，実際には，制約の重みは連続的な数値でとらえられるようなものと考えており，変化は漸進的に進んでいたと考える。各時代毎と見える連続は，連続的な数値変化がある程度進んで，明確な差異が生じるようになった段階のものを示していると理解されたい。

22 上代のデータベースである万葉集はほとんどが５拍，７拍を中心の単位とした韻文の和歌であり，韻律を無視してよいのかは大きな問題である。実際，無助詞と各助詞では，１拍の違いがあり，その有無は，上接名詞の拍とinteractしていたと言わざるを得ない。たとえば，主語が「ほととぎす」（５拍）であれば，現実には無助詞としてしか生起していない。ただ，この問題は，たとえば「ほととぎす」が５拍だから無助詞になるのか，無助詞が可能だからこそ，「ほととぎす」が７拍の句ではなく５拍の句に出てくるのか，という問題につながり，その答は明確ではない。そのため，ここでは，文法的な可能性が優先し，韻律による選択は，文法的に「可能」な候補者間で行われるとしておく。

23 ここでいう，無助詞の生じにくい文脈とは，脚注11でも触れた，準体句（連体形節）がそのまま主語となっている場合を指す。準体句では，句末が述語であるので，そのまま無助詞で述語を導くと，述語が並んでしまい，文意が伝わりにくくなるので，それをさけるためにガの使用が広がっていったと野村（1996）は考察している。

24 係助詞ゾであっても，主語につくばあい，上接語卓立の強調と，全文強調の両方があった。山田（2001）が示すように，ゾはこのうち，上接語卓立へと機能を狭めていき，ガは両方の機能を持つようになる。

25 では，なぜ上代にこのような推意によって上接語強調を示すようなガがなかったのだろうかという疑問が生じるかもしれない。この点については，g-promと関係があるのかもしれないが，このような強調は，地の文，会話文で出てくるものなので，上代の万葉集，古事記などではジャンルのせいで観察されなかった可能性もある。また，実際には，上代にも少数の例はあったのかもしれない。事実，山田(2001)には，中古前期の「竹取物語」からの例が観察されている。終助詞ゾではないが，上代の疑問のカの終助詞用法の際の主語は，ノ・ガでなく，無助詞かハが出ることになっているが，実際には少数の例外が観察されている（ハ　120：無　130：ノ・ガ　7）。中古の全データの数も決して多くはなく，その数を見ると，上代にも少数の例はあった可能性は否定できない。本稿の提案では，この時代までのガのプロファイルには上代から変化がなかったと仮定しているので，このような推意に依存した強調用法が上代からあっても問題はない。

26 本稿では，どのような原因によって+STR(Case)の重みが増すことになったのかについては考察を加えない。生成文法のような統語上の理由の可能性もだろうが，機能的な説明の可能性も否定できない。ここでは，日本語の文法体系上，格の明示への要求が高まっていったことのみをとらえている。

27 語順の上でも，複数のガ格が出てくる多重主語構文では，中立解釈のガは述語の直前にしかこない。つまり，前置されているガは総記の解釈になる。

28 いうまでもなく，主題や対照の「ハ」は，格助詞ではなく，これら「ガ」「ヲ」「ニ」「ト」の代わりや複合形として，すべての文脈に生起しうる。

29 『平家物語覚一本』の成立時期の詳細は明確ではないが，こちらでは終止形終止と，終止的文脈での連体形との間に，ガ優勢とノ優勢の区別があり，終止形終止ではガが優勢だが，連体形終止ではノが優勢という傾向がある。一方，『宇治拾遺物語』では，いずれの文脈でもノがガの約 10 倍，生起している。

30 ただし，名詞修飾や名詞節という名詞文脈に生起する連体形だけは, [+v, +n]という素性を持ち続けると考える。

31 鎌倉期に増大した「トゾ」「ヲゾ」「ニゾ」のような複合形が室町期にゾを落とした形になっていくのも，主節での連体形終止が名詞性を失うことと関係があると考えられる。

32 無助詞主語の使用は明治以降も残る(Fujii 1991)。現在は，話し言葉では助詞の脱落は少なくないが，書きことばで格助詞の使用はほぼ義務的である。ただ，この文体上の差異が，文法的には義務的である一方，話し言葉で省略されていることを示すのか，明治期に日本語の書きことばが整備される段階で，書きことばに規範的なルールが課されるようになったためであるかは明らかではない。現代日本語の書き言葉のモデルは東京のことばであったが，もともと西と東の格助詞の使用度には地域差があったという意見もあり(金水 2001)，この問題の詳細は不明と言わざるをえない。

33 つまり，ここでは，格助詞の使用が義務的になっていくことは，日本語の文法体系に起こった変化と考える一方，必ずしも統語構造上の理由によるものではないと考えている。

34 総記のガが他の助詞と異なることがあるとすれば，それは，ガが付く名詞句には，文法的な主語と呼べないものも含まれることであろう。つまり，有名な例，「文明国家が男性が平均寿命が長い」の下線部のガが付いている名詞句は，文法的主語ではなく，主題（Topic）的に命題とつながって行くものである。この問題は，多重主語の問題と重なっており，ここでの問題の範囲を越えるので扱わないが，多重主格の構文として分析できると考える。

References

安達隆一 (1992)「国語構文史の一側面：主格無標示構文から主格標示構文へ」『古代語の構造と展開　継承と展開１』大阪：和泉書院 (pp. 1-23.)

Boersma, Paul (1997) “How We Learn Variation, Optionality, and Probability,” *IFA Proceedings 21*, 43-58.

Bresnan, Joan, Shipra Dingare, and Chirstopher D Manning (2001) “Soft Constraints Mirror Hard Constraints: Voice and Person in English and Lummi,” *On-line Proceedings of the LFG2001 Conference*, ed. by Miriam Butt and Tracy H. King, CSLI Publications, Stanford, CA.

Croft, William (2003) *Typology and Universals*. 2ed. Cambridge: Cambridge UP.

江口正弘 (1986) 『天草版平家物語対照本文及び総索引』　東京：明治書院

江口正弘 (1994) 『天草版平家物語の語彙と語法』　東京：笠間書院

Fujii, Noriko. (1991) *Historical Discourse Analysis: Grammatical Subject in Japanese*. Berlin: Mouton de Gruyter.

Harada, Naomi. (2005) “Nominative-Genitive Conversion: Aspects of A’-Agreement,” ms. ATR.

Kato, Yasuhiko (2003) “Negation in Classical Japanese: Projection and Movement,” *Sophia Symposium on Classical Japanese and Linguistic Theory: Sophia Linguistica* 50, 91-102.

Kikuta, Chiharu U. (2003) “Subject Case Marking in Early Classical Japanese; A New Perspective from Stochastic Optimality Theory,” *Japanese/Korean Linguistics* 12, ed. by W. McClure, 152-164, CSLI Publications & SLA, Stanford, CA.

Kikuta, Chiharu U. (2005) “An Optimality Theoretic Alternative to the Apparent Wh-Movement in Old Japanese,” *On-line Proceedings of the LFG2004 Conference*, ed. by Miriam Butt and Tracy H. King, 289-306, CSLI Publications, Stanford, CA.

金水敏 (2001)「助詞から見た日本語文法の歴史」文法研究会第３回集中講義　東京大学.

久野暲 (1973) 『日本文法研究』東京：大修館書店

Kuroda, S.-Y. (1988) “Whether We Agree or Not: A Comparative Syntax of English and Japanese,” *Papers from the Second International Workshop on apanese Syntax*, ed. by William J. Poser, 103-143, CSLI Publications, Stanford, CA.

Kuroda, S.-Y. (2005) “On the Syntax of Old Japanese,” ms, University of California, San Diego.

Miyagawa, Shigeru. (1989) *Syntax and Semantics 22: Structure and Case Marking in Japanese.* San Diego: Academic Press.

Miyagawa, Shigeru & Fusae Ekida (2003) “Historical Development of the Accusative Case Marking in Japanese as Seen in Classical Literary Text,” *Journal of Japanese Linguistics 19*: 1-95.

小路一光 (1980)　『萬葉集助詞の研究』東京：明治書院

大野晋 (1993) 『係り結びの研究』東京：岩波書店

野村剛史 (1993)　「上代語のノとガについて（上下）」『國語國文』62 巻２号, １－17；

62 巻３号 , 30-49.
野村剛史 (1996)「ガ・終止形へ」『国語国文』65-5.
野村剛史 (2001) 「係り結びの変遷」文法研究会第３回集中講義　東京大学.
山田昌裕　(2000) 「主語表示『ガ』の勢力拡大の様相：原拠本『平家物語』と『天草版平家物語』との比較」『国語学』51.1: 1-14.
山田昌裕 (2001) 「主語表示『ガ』の強調表現における勢力拡大の様相：『ゾ』との関連性において」『国語国文』70.8: 32-48.
柳田征司 (1985)『室町時代の国語』東京：東京堂出版
Yanagida, Yuko (2003) “Obligatory Movement and Head Parameter: Evidence from Early Old Japanese,” *Sophia Symposium on Classical Japanese and Linguistic Theory: Sophia Linguistica* 50, 103-116.
Yanagida, Yuko (2005) “Ergativity and Bare Nominals in Early Old Japanese,” a paper presented at Workshop on Theoretical East Asian Linguistics, Harvard University.
Watanabe, Akira (2002) “Loss of Overt Wh-Movement in Old Japanese,” *Syntactic Effects of Morphological Change*, ed. by David W. Lightfoot, 179-195, Oxford UP, Oxford.

テキスト及び電子テキスト

『平家物語　1-2』（新日本古典文学大系　44-45） 東京：岩波書店
『平家物語　1-2』（新編日本古典文学全集　45-46） 東京：小学館
『平家物語』（新潮日本古典集成：1979）（百二十句本平家物語：国立国会図書館蔵本を底本とする。）日本文学電子図書館(http://www.j-texts.com/index.html)
『天草本平家物語』（岩波書店：1927） (http://www2s.biglobe.ne.jp/~Taiju/am_heike.htm)
Japanese Text Initiative Electronic Text Center, University of Virginia Library
(http://etext.lib.virginia.edu/japanese/heike/heike.html)
国文学研究資料館 (http://www.nijl.ac.jp/contents/d_library/index.html)
明治学院大学　日本古典文学翻訳データベース
(http://www.meijigakuin.ac.jp/~pmjs/trans/transj.html)

Synopsis

The Development of the Nominative Case Marker *GA*: A Competing Constraints Approach

Chiharu Uda Kikuta

The establishment of the particle *ga* as a nominative case marker in the Muromachi-period is supposed to mark the beginning of Modern Japanese. A theoretical question is whether this directly reflects a drastic change in the syntactic make-up of the language. Researchers in Japanese philology (Kokugo-gaku) have implicitly answered this in the negative for a long time, while generative syntacticians explicitly claim the opposite.

Although the generative approach claims to be scientific, and therefore close to the truth, it is still doubtful whether the change in behavior of particle *ga* directly pertains to structural change. In Old Japanese (OJ), *ga* is only one of the possible nominative markers; the subject argument can be realized in such forms as *ga*, *no*, zero, *wa* (or *mo* and other kakari-zyosi), and their distribution is syntactically overlapping. If case markers only indicate the structural position where they occur, as generally assumed by generative syntacticians, all the markers (including zero) in OJ should be syntactically distinguished. However, there appears to be a considerable amount of overlap and optionality in the choice of subject markers. The problem, I believe, is that while *ga* is a case marker, it is not just a label of a syntactic node, but a morpheme with its own content.

Along the lines of Kikuta (2003, 2005), this paper proposes to separate abstract case marking as a type of argument licensing on the one hand, and

morphological case marking as a choice of the most adequate phonological/ morphological realization of the abstract case on the other. Following the ideas of the lexicalist frameworks HPSG and LFG, I assume that the abstract case marking is done lexically by a head predicate selecting (subcategorizing for) the argument. The abstract case, such as the nominative and accusative, will be realized in some appropriate phonological form. The choice of the appropriate form depends on two major factors: the syntactic-functional profile of each marker and the interaction of constraints affecting the choice.

The diachronic change leading to the establishment of *ga* as nominative marker also results from the interaction of the two factors, both of which have changed over time. The case marker *ga* becomes by far the best choice to mark the subject argument in Muromachi, when (1) *ga* becomes compatible with verbal arguments while *no* retains the nominal character and (2) it becomes more important in Japanese for case to be explicitly marked by appropriate morphological case markers.

The proposed analysis has a significant implication in that the apparently complex diachronic change in case marking can be seen as a consequence of interactions of separate, gradual, unidirectional changes in the weight of constraints and slight changes in the profile of case markers. This implication is preferable for the obvious reason that language change within a monolingual community ought to be gradual, and lends support to the approach taken in this paper.